Encouragement of university life

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-10-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Takamura, Toshinari メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/00059769

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

大学生活のすすめ

Encouragement of university life

金沢大学大学院 医学系研究科 内分泌・代謝内科学分野
篁　　俊　　成

医学部学生時代から，大学院，ポスドクを経て，現在に至る38年間，そのほとんどを大学で生きてきた．青春時代のひととき，市中病院に間欠的に計2.5年間勤務した．第一線の臨床経験を積むことができ，楽しいイベントも多かった．毎回，大学に引き戻されるときには暗澹たる気持ちになった．しかし，今振り返って思うに，大学での生活は，一般病院では得難い目眩く体験に満ちている．私のような若輩が大学生活を振り返るのは時期尚早とは自覚している．しかしあえて本稿では，研究離れの現実が憂慮されている日本において，若い人に大学生活の素晴らしさを伝えることを試みたい．

大学生活には次の3つの良いことがある．多くの人と出会う，挑戦･成長する，そして未来を創ることである．

1. 多くの人と出会う喜び

人生の最後には大切な人たちとの思い出しか残らないのではないか．大学と関連病院の人事異動は4月1日，それが何曜日であれ，どんなに遠方への移動であれ．30数年間，毎年見送りと出迎えを定点で繰り返している私にとっては連続の通過点にすぎない．今年も3月31日，一人，また一人，かけがえのない時間を共有した仲間が「お世話になりました」と挨拶して新しい勤務先に向かって行く後ろ姿を見送る．そして，翌4月1日，希望に満ちてきらきらした新しい仲間を迎える．こうして友は増え，組織は新陳代謝を繰り返していく．別れと出会いのクロスロードがなければ何げに通りすぎてしまうであろう季節，変わらない環境で変わり続けることこそが難しい．しかし，希望とやる気に満ちた新人を迎えることで，自分自身もリセットし，フレッシュスタートを切ることができる．自分が変わり続けるためには何が必要なのか，よく考えながら，思いを新たに過ごしたい．そして，新たな仲間と次の目標を目指そう．「動的平衡」から，すこしでも「進化」するために．

2. 挑戦･成長する喜び

大学生活も長くなるにつれ，職場には後輩が増えていく．後輩に背中を見られている，という意識は，弱音を吐けない，あるいは気を抜けない辛さはあるものの，地位が人を創る，といわれるように，自分が成長できるチャンスでもある．一方で，大人になるにつれ，叱ってくれる先輩が周りにいなくなっていく．足りないところを指摘されること，言動を批判されること，調子に乗るなといわれること，これらは全て辛い体験だ．心が折れることもある．しかし，そのときこそ成長するチャンスなのだと，あとで振り返って気づくのだ．面と向かって自分を正してくれる先輩，友人，後輩を大切にしたい．もちろん，褒めてくれる人も必要だ．彼らがいなければ辛すぎる．

大学にはもとから勉強好きな人たちが集まっているのではない．私も学生時代から，勉強より遊ぶほうが断然好きだ．しかしそんな私でも，新しいことを知る，何かができるようになる，そして小さな発見をする，そんなときに生きていると実感する．趣味に割く時間が減ったかもしれない．気づけば，「仕事が趣味」というつまらない大人になってしまった．だったら開き直って，知る，できる，見つける喜びを存分に享受しようではないか．

成功も失敗も，どちらも貴重な発見だ．発見が多いほど人生は豊かになる．大学生活には辛いことも，うれしいことも，ともに多い．挫折がつきものである．良いことは続かず，必ず失敗する．仕事の内容も，creativeなことばかりでなく，大部分が地道な仕事の繰り返しかもしれない．私の教育・研究生活は波乱万丈のように思える．しかし，地道に続ければ，悪いことばかり続くわけでもない．リスクを冒すことに躊躇することなく挑戦する，多くは失敗する，しかし，挫折のあとの成功こそが，それが小さなものであれ，大きな達成感をもたらしてくれる．それは成功し続けるよりも，人生を豊かにしてくれる，と前向きに捉えるようにしている．

3. 未来を創る喜び

子供の頃は，「大人になったらノーベル賞をとりたい」，と思ったことがあったかもしれない．凡人である私は，成長過程で挫折を繰り返す中で，大きな目標を少しずつ下方修正し，自分をごまかしながら，しかしその時々の現実的な目標に向かってもがき続けてきた．今も小さな夢に向かって研究・診療に取り組んでいる．しかし残念ながら，どう考えても，教科書を塗り替えるような大きな生命現象を発見したり，革新的な治療法を開発したりできそうにない，という現実も見えてきた．そんな大学人の役割は何か．それは後進の育成と大学のシステム進化に貢献することではないか．これらを通じて，自分の世代では成し遂げることができなかった大きな仕事が金沢大学で実現するかもしれない．若い人たちと汗だくになって仕事をする過程で，自分の予想を超えて成長する彼らの姿に驚く．当然，彼らから教わることも多い．直接指導できることは限られている．だからこそ勇気を持って，see one, do one, teach oneを目指してきた．私が36歳で研究室チーフになったとき，研究者として未熟な自分が，ラボを運営して，多くの大学院生を同時に指導できるのか不安だった．今振り返って思うに，たとえ未熟者同士でも，チームでなら，一人ではできないことも達成できるし，指導することは，教わること以上に，自分が学び成長することに有効だった．もう一つの大学人としての役割は，教育・研究のシステム進化につながる組織の運営と改革である．学長，理事，研究科長，系長には遠く及ばないが，すべての大学教官は何らかの委員会に属して，大学と附属病院の運営に携わっている．正直言って，私はこれが苦手である．自らのチームを運営することだけでも大変なのに，大きな組織を俯瞰した管理運営業務にエネルギーを割く余裕はない．一方で，私は母校を愛している．あるいは母校とは腐れ縁で決して離れることはできない，という宿命を感じている．私が憧れる美学は，think globally, act locallyである．トップ研究機関でいい仕事をするよりも，不利な環境にあって，それぞれが得意なことを持ち寄ったチームから，世界を驚かせる知見を発信することこそが，最高にcoolだと思う．自分を育ててくれた金沢大学を進化させることは，自分の美学を追求することと矛盾しない．今は，教育・診療・研究を通じて大学に貢献するべき時期だと思っているが，同時に少しずつではあっても，administrativeな仕事にも貢献していかなければいけない，と思っている．

以上，巻頭言の機会をいただいたことで，大学生活が自分の人生に及ぼした意味を振り返る機会となった．専門医を目指してがんばっている若い医師たちが，36歳になった自分を想像したときに，大学生活も悪くないかも，と思ってもらえれば幸いである．

2020年，桜舞うキャンパスで